

国立青少年教育施設と子どもを繋げ、自然体験活動の機会が多い街へ

自然体験活動がなぜ必要なのか

文部科学省では、自然体験活動を「自然の中で、自然を活用して行われる活動であり、具体的には、キャンプ、ハイキング、スキー、カヌーといった野外活動、動植物や星の観察といった、自然・環境学習活動、自然物を使った工作や自然の中での音楽会といった文化・芸術活動などを含んだ総合的な活動である」と定義しています。

具体的には、次のような点において効果があると考えられています。

- 1 現実の世界や生活などへの興味・関心、意欲の向上
- 2 問題発見や問題解決能力の育成
- 3 思考や理解の基盤づくり
- 4 教科等の「知」の総合化と実践化
- 5 自己との出会いと
達成感や自尊感情の獲得
- 6 社会性や共に生きる力の育成
- 7 豊かな人間性や価値観の形成
- 8 基礎的な体力や心身の健康の保持増進

< 概要 >

子どもの自然体験活動は、2010年代を通じてやや減少傾向がみられ、コロナ禍を経た令和4年にはさらに減少しています。（下図）

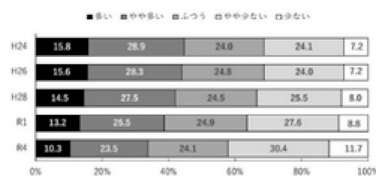
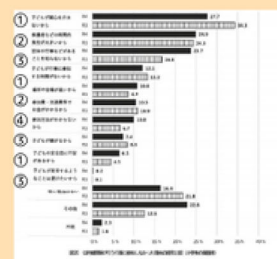


図13 自然体験の経年変化 (小4～小6、中2、高2)

実際に参加する子どもたちはもちろん、子どもを自然体験活動に参加させることが難しい保護者や地域の現状を知ること、打開策が見いだせるのではないかと考えました。

そこで私たちは、自然体験活動への参加の壁となっている要因を踏まえ、自然体験活動やレジャースポーツに参加しやすい街づくりについて提言します。

参加しなかった保護者の理由



ハードルとなる意見を大まかに分けると



- ①子どもが自然体験活動に関心を示していないと保護者が考えている
- ②保護者の時間がないから
- ③団体や行事への参加方法が分からない・信頼できない
- ④お金の問題

ハードル①

子どもの関心が自然体験活動に向いていないと保護者が考えている

3割以上の保護者が子どもが関心を示さないからと回答しました。しかし本当に子どもに起因しているのでしょうか。体験活動が苦手と思っている保護者の子どもほど、体験活動の機会が少ない傾向がみられます。（下図）つまり、子どもが興味を示さないことよりも、子どもが関心を持っていない家庭環境が課題であるということです。

また、子どもの自由時間の過ごし方の変化や、IT端末の普及によって、遊び場所が外から室内へと移ったことが大きな要因にもなっています。



図14 子どもの関心と保護者の関心の関係性

ハードル②

保護者の時間がない

子どもが体験活動に参加するためには、送り迎えなどの保護者のサポートが必要です。しかし、1996年以降、共働き世帯の割合が増えています。さらに核家族が一般的になったことで、子供を体験の場に連れていく人がいない世帯が増えました。その結果として、子どもの体験活動の機会が減っていることが分かります。

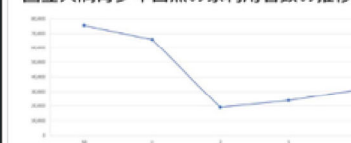


図15 共働き世帯の増加と自然体験活動の減少

ハードル③

団体や行事への参加方法が分からない・信頼できない

国立大隅青少年自然の家利用者数の推移



自然体験活動の場である国立青少年教育施設の利用者数は、コロナ禍を経て回復傾向にあるものの、その大部分を、学校団体や地域のスポーツクラブ団体が占めています。教育的な意義があれば、家族単位で利用できる、安価で良い体験ができる施設であることを、地域の保護者や子どもたちに認知されていないことが現状です。活動プログラムをSNSで発信していますが、ハードル①④などが原因で効率よく呼び込めているとは言えません。

ハードル④

お金の問題

公的機関等が行う自然体験活動に関する行事へ小学生が参加しない理由として、世帯年収が400万円未満の家庭は、**経済的**あるいは時間的な負担によるものが多くみられます。宿泊を伴う体験の参加費の相場は、一泊1万円です。低所得家庭の子供たちが、体験活動に参加できるようにするためには、補助金の活用や、スポンサーの協力が必要になります。しかし、それらを手配することは保護者個人では難しいです。

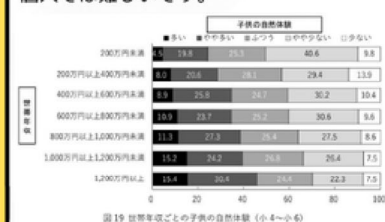


図19 世帯年収ごとの子供の自然体験参加率 (小4～小6)

これらの現状から、保護者が

子ども（利用者）と教育施設（場）のつなぎ役として機能していないために
体験格差が生じていることが分かった

保護者の代わりに子どもと教育施設のつなぎ役となり
子ども達に体験活動の場を提供する団体があったら？

次ページへ

ここでは、鹿児島県鹿屋市の白水町地区の子ども会と、国立大隅青少年自然の家を鹿屋体育大学の学生がつなぐという構想を例に挙げながら提言します。

(場)は(利用者)を(利用者)は(場)を求めているため、体験活動を企画し、両者間をつなぐ団体を作ります。ここで重要となるのが、活動自体を主導するのは自然の家であるということです。

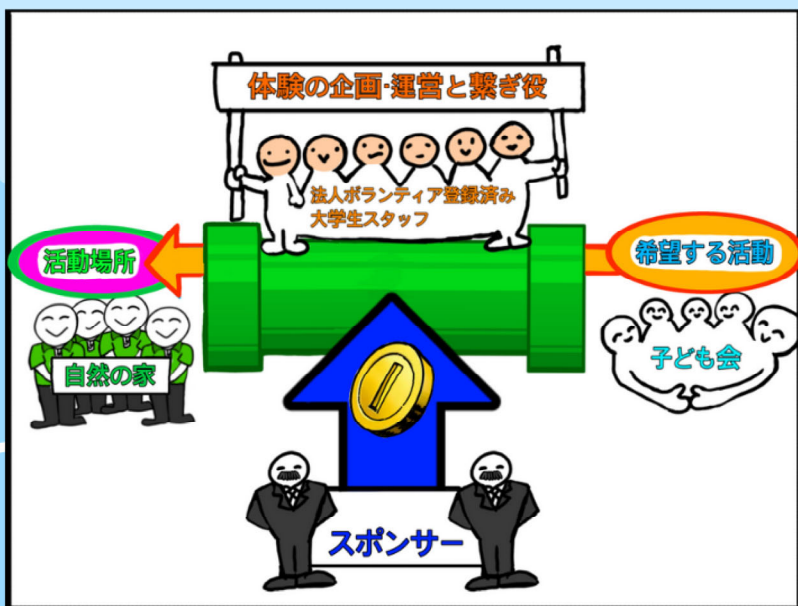
大学生個人では保護者から信用してもらうことが難しいからです。大学生スタッフでこの事業を行うためには、自然の家との連携体制が必須です。あくまでも、活動自体を主導するのは自然の家であるということをアピールし、保護者に理解してもらうことで信用を得ます。

連携を取りやすくするために、スタッフは法人ボランティアに登録します。

法人ボランティア制度とは独立行政法人国立青少年教育振興機構が実施する「ボランティア養成事業」に参加し、知識や技術を学んで登録し、全国にある国立青少年施設でボランティア活動を行うことができる制度です。

自然の家と保護者の理解と信頼を得ることができれば、円滑に両者間をつなぐ役目が果たせます。

自然の家にとっては利用者を連れてくる団体、子ども会からは体験活動の場所を用意してくれる団体となります。



実行までの流れ



実行

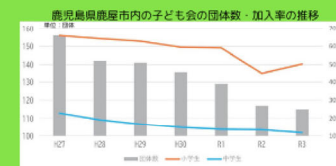
なぜ、大学生がつなぎ役になる必要があるの？

学生というだけで、応援してくれる大人が増える
↓
大学生はスポンサーを獲得しやすい
↓
参加費を抑えられる

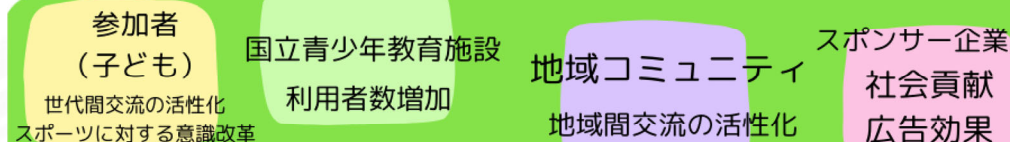
鹿屋体育大学は地域と活発に交流することを
うたっているものの、関わり方に偏りがある
↓
つなげる仕事をする中で、大学も地域コミュニティ
に参加することができる。

なぜ、子ども会をターゲットにするの？

- ・活動ごとに保険に入る必要がない。
- ・子どもたちの話し合いの場に参加できて、保護者ではなく子供のニーズに応えやすい。
- ・一定数の子供がそろっているため、集客が容易
- ・鹿屋市は子供会に力を入れている



期待される効果は？



子ども達が
自然体験活動に参加しやすい街づくり！